霊感・霊覚に関するいましめの言葉

（友清歓眞著 述からの抜粋です）

（一　心　伝）

自他の所謂霊覚を妄信すること勿れ。是れ魔類に乗ぜられる機縁をつくるものなり。只だ神典の所伝を信条として正道正義を以て万事を判断すべし。人道にはづれたる神道なるものあること無し。

（古道神髄）

所謂霊感神託を妄信するの害は今更ら申すまでもないことだ。わけても政治とか軍事とかについてみだりに神託の如きものに期待すべきでない。人事を尽し、御上の大稜威と天神地祇の幽賛冥助とによりてやって行けばよいのである。官国幣社を崇拝して居て霊感を得たものはそれが必ず正しいと考へ込んで居る人がある。気の毒とも滑稽とも話にならぬ。閑神野鬼の類が正神を装うて憑依するのはどんな立派な神社の大前で神憑り式を行つても平気であって、それを正しい霊感と誤解して居る人が百中の九十九まで然りである。

年がら年中のべつに霊感現象のある人は殆ど皆な然りである。正神といふものは年がら年中人間に感応して色々のことを見せたり告げたりせられるものではないのである。

（天行林、付録　闇室妄書）

汎き意味に於ける霊覚なるものは一度開発した人には多くの場合杜絶えることなく続くものである。けれども法を受持する心事が敬虔を欠き、公正を欠いた瞬間からモウ正神界の守護はなくなる。正神界の守護が無くなるや否や忽ち邪霊がこの機に応じて作用する。斯くして邪霊に乗ぜられても、邪霊は本人に感づかれぬやう従前の如く正神界の交渉ありし儘に言動するから本人は邪霊とは気づかない。

◇

邪霊との交渉を八釜しく排斥するのは、邪霊と交渉するものは現界に於て終りを善くしないか又は帰幽してから邪霊界の支配を受けるやうにるからである。

◇

慢心と排他的感情とが正神界から邪霊界へ移る門である。少しでも慢心があるか、排他的感情が影を宿すならば正神界には通じない。さういふ時に神迎へをしてはならぬ。

神主か審神者か侍坐者を讃めるやうな口勿の神示があつたり、他者を排斥するやうな意味の霊示ありとせば其れは必然正神に化けたる邪霊の狂言とみてよい。

◇

審神者の霊眼に正神の御姿を拝するとか又は種々の正神降下の特徴ある霊的現象があつたからとて其れが正神の来格たる証拠にはならぬ。そんな狂言位ゐは多少腕のある邪霊でも朝飯前だ、そんなことで誤魔化されるやうでは審神者はつとまらぬ。なまなかな霊覚は審神者に有害無益である。審神者は直霊の曇らぬことを第一に心がけ、神人不二の見地に確乎と端坐して、当面の理非を鑒別ければならぬ。

◇

普通の人力で得がたいものを得たときに、直ちにそれを神業にしてしまひたがるのは斯ういふ方面に未熟なる人間の共通的弱点である。そこで妙な妖物が立派な神に祭り上げられる場合が多い。或種の霊的現象に対してもソレが果して真神であるか偽神であるかを完全に究めることは相当に困難な場合がある、まして其の細密なる種別を看破するには誰れしも一と苦労しなければならぬ。

◇

たいていの霊媒を通じて現はれてくる霊は、たとひ如何に巧妙に仕組んで種々の神名や人名を名乗るとも、多くは其の霊媒に憑つてゐる一個の宿霊の演出いたしまする曲芸で、多数の人格や神格を織り出し周囲の人々を烟に巻き三拝九拝せしむる腕の冴えと申すものは実に驚くべきものがあるので、多少の奇蹟を現はすことも出来るのであるから一旦それを信じ込むや容易に其の殻から脱け出ることが六かしくなる。

◇

正神にあらざる霊が正神を装ひて現はれる場合は必ず殆んど紋切型に排他的である点を注意しなければならぬのである。

『世間にある交霊現象は皆な駄目で真の神は此処に始めて出現したのである』といふ意味のことを必ず申すものであり又た『此のところが正神界の中央政府であるから此処から出たことでないと正しい神示とは申されぬぞよ』といふ意味のことを必ず宣言し、『よそでやつてるのは此処の経綸を盗んだ真似事であるぞよ』といふ意味のことを必ず広告する癖があるものである。

（神道古義）

取敢ず何か目前に奇験があれば其れを神祇として拝むことを少しも怪まないのは呆れ果てたことである。又た左ういふところのカミサマでも仁義道徳を説いたり潔癖であつたりする場合が多いが、それをみて直ちに其れを立派な神霊であればこそと妄信する者があるが、沙汰の限りである。

妖霊邪鬼の徒でも正神を装ふことに全精根をつくして居るもので、それに乗ぜられる人間が相変らず多いのは慨すべきことである。その正邪の審査を厳かにせよと云ふのである。

（霊の世界観）

（1）高貴の大神は滅多に人間に感合せられるものでない。殆ど間断なく高貴の大神が憑依せられるといふやうなのは大概邪霊の仮装であると断じて可い。

（2）高貴の大神が国家的の公事に関して細々と幾百語幾千語を啓示をせられることはない。稀れに啓示を下さることがあつても、それは必ず簡素のものである。

（6）正神界に於てはどういふ理由あるにせよ、他者に対して個人的に霊的危害を与ふる如き道術は断じて行はれない。そんなことを云為するものありとせば必然邪鬼妖霊で、そんなものに関係するのは人間としても人格破綻者である。

（7）高貴の大神が人間界の活動に対していちいち具体的に世話を焼かれ、指図をせられることはない。そんなことをするのは殆ど悉く偽神邪霊の正神擬装現象である。

（10）普通人を驚かすやうな奇異の霊的現象は決して其の正神たる証拠にならぬ。原則として正神界ではそんなことをせられないのである。

（12）偽神邪霊でも、その言動は如何にも道徳的で、又た烈々たる愛国心の権化の如く見ゆるもので大概の人々を感服せしめ、成るほどと思はしめる腕を有するものである。スパイが百中の九十九まで真実を語り、あとの百分の一で謀略の目的を達せんとするのと同じ手口であるが、熱意過剰の愛国運動者などが昔からよく引ツかゝられるのである。

（13）正神界では原則として万事が常識的で、つとめて奇異のことを避けられるから、いかにも精彩に乏しく見え、気分のあせる人々は物足りなく一応感ぜられるが、冥々の間に大局的に感応せられ守護啓導せられ、一時的には逆コースを進むかに見えることがあつても、結局に於てくしびの恩頼をかゝふらせしめ給ふものである。

―――――――――― 以下は無奇の神通に関して ――――――――――

（玄扈雑記）

無奇の大神通こそ本当のものであり、神々はソヒアヒツクラス（預鎔造）のであり、預字を綏靖紀に阿曽布（あそふ）と訓（よ）んでゐるごとく人間が事を行ふ当然のことに神徳が相加（そいあう）ことが正しい神人感合の原則であらう。

（霊の世界観）

注意すべきは公を祈り私を貪らないことであつて、国家のためなり主人のためなりだけを至誠をもつて祈つて居ても、神々は其の人の事情も何も照鑒したまふものであるから場合によつて奇験をも下し給ふものであつて、さうでなくても斯ういふ人々は冥々の間に守護啓導を受けるものである。次ぎに注意を要するは、何事も信力と続行とが必要であるといふ点である。

奇異のことは異例であつて、さういふことを求めてはならぬといふことである。正神界では原則として奇異のことを人間世界に示されずに冥々の間に守護啓導を垂れたまふものであることをよく肚に入れて、平素において「無奇の大神祜」を感謝しなければならぬのである。

（神道古義）

神前で何事かを祈念するにしても汚れた心では駄目なこと申す迄もありませんが、汚れなき心を以て祈る、その心は即ち神の心で、「神としての我れ」が神に祈念するから感応があるのであります。「神たる我れ」が神としての修行をするのでありますから修行そのものが尊いのであります。修行の第一歩からして尊い神行なのであります。それによつて霊眼が開けたの、霊耳通になつたのといふことは第二の別問題なのであります。

実際必要な時機が来たら何時でも神々の摂理の下に神通は開けるのでありまして、人が神に憑（かか）るのでなく神が人に憑られるのでありますから、いらぬ心配は御無用であります。又た朝夕神拝をして居たり修行をして居たりすれば神通の自覚はなくとも神の摂理で道俗ともに万事よい方に導かれて行くのでありまして其れが無奇の大神通なのであります。正しき神法の修行は目前の得不得に拘（かか）はらぬもので、幼稚園の運動会の如く負けても勝つても褒美を貰ふのであります。眼前に奇怪なる現象がなければ神徳を戴いた感じのない人はオゾンパイプでなければ清浄な空気は吸うたことがないやうに思つてる人たちであります。病気について祈願しても何か奇怪な現象があれば少々経過は悪くても喜び、何の奇もなく良好の経過に導かれる場合は別段ありがたいとも思はぬやうな人があるのは甚（はなは）だ遺憾に存ぜられるのであります。

かくべつの事情がなければ奇異の現象を示されないのが寧ろ正神界の通則なのであります。